

赤頭巾ちゃん

57

登場人物

赤頭巾ちゃん

男

老婆

白頭巾ちゃん

黒頭巾

豚所長

警備員

以下の役は、適切であれば兼役されても問題はない

豚 1 (影 1)

豚 2 (影 2)

豚 3 (影 3)

豚 4 (影 4)

少女 (赤頭巾ちゃん、あるいは、白頭巾ちゃん、あるいは、あなたの思う「少女」)

赤頭巾ちゃん あらすじ

豚達が精肉工場に入っていく。豚達は、自分がこれからどうなるか分かっていても、足を止めることは許されず、ただ歩いていくことしかできない。そんな豚達を、赤頭巾ちゃんは嘲るように、同情するように見つめる。

工場を首になった男が、工場前にやってくる。彼は、工場やその主である豚所長への憎しみを小便に込め、ゲートに向かい立ちションする。非常にしようもない抵抗であるが、男にとってはとても大きな意味があったらしく、終えた後、自信満々に立ち去ろうとする。そんな男に赤頭巾ちゃんは、

「こんばんは」

口から心臓が飛び出そうになる男。そんな男に赤頭巾ちゃんは、お世辞を言ったり持ち上げたり。それから叩き落とす。男はそんな赤頭巾ちゃんに振り回される。

赤頭巾ちゃんがかに気付き、隠れる。

非常に面倒な老婆がやって来る。なにかにつけて男によいしよをもとめ、その度に男は付き合わされるが、段々と腹が立ってきて口論になる。

「うるせえぞボケがっ！」

工場から怒り心頭のごろつき警備員が出てきた。平身低頭に謝る男とは対照的に、老婆は変わらず偉そうにしている。警備員は老婆をロックオンし、襲い掛かる。老婆は脱兎のごとく逃げ出すも、警備員はライオンのように追う。いつしか二人の姿は見えなくなつた。

「ここでは一日どれくらい死ぬの？」

また現れた赤頭巾ちゃんからの、精肉工場の業への問い。男はそれに加担していた。赤頭巾ちゃんのひとつひとつの問いに、吐き気がこらえきれない。赤頭巾ちゃんはまた隠れる。

雪のような、西洋人形のような白頭巾ちゃんがやってくる。どうやら彼女は、姉を探しているらしい。その探し人は、赤頭巾ちゃんのようにだ。男は白頭巾ちゃんに、彼が思う赤頭巾ちゃんの内面を語る。

「優しくしてあげて下さい」

どうやら赤頭巾ちゃんも白頭巾ちゃんも、誰かに春を売らされているらしい。男は言葉もない。そんな男を置いて、白頭巾ちゃんは去る。

打ちのめされた男の前に、また赤頭巾ちゃんは現れる。そんな彼女のためになんとか出来ないかと思案する男。そんな男に、また赤頭巾ちゃんは男の業を突きつける。

「ベジタリアンなんだ！」

男は、長い工場生活で肉が食えなくなつたと語る。そんな話を赤頭巾ちゃんは、興味深げに、あるいは、人の不幸は蜜の味とばかりに聞く。

赤頭巾ちゃんの兄役をする黒頭巾が、斧を持ってやってくる。怯える男。黒頭巾は、買
いもせずに赤頭巾ちゃんという男を、ばらそうとする。そんな黒頭巾だが、赤頭巾ちゃん
の話聞き、その手を止める。

「お前は、自分が食べるわけでもない豚を殺した金で飯を食ってきたのか？」

その問いに、男は答えることが出来ない。そんな男を嘲笑い、黒頭巾も去っていった。
そんな男をまた煽る赤頭巾ちゃん。飛び掛かる男。赤頭巾ちゃんを食ってやろうとする。
しかし、出来ない。男にはそんな大それたことをする力はない。

「去勢された豚さん、それがおじさんだよ」

男はそう言われ、否定したくとも、どうしても否定できない。

そこに豚所長がやってきて。

オープニング

深夜の精肉工場前。
ゲートが、ポツカリと開いている。

豚達が、ギロチン台に向かう死刑囚のように整然とやってくる。

そんな豚達を慰めるかのように、嘲笑うかのように、赤頭巾ちゃんが赤い花束を持ってつき纏ってくる。

豚達、立ち止まる。

赤頭巾ちゃんも立ち止まる。

豚達 どうも。

豚1 あなたはどちらから？

豚2 私は東から。あなたは？

豚3 俺は西から。あなたは？

豚4 あたしは南から。あなたは？

豚1 僕は北から。僕は世界中から集まってきたんだなあ。

豚2 それは言い過ぎ。

豚1 そうでしょうか。

豚2・3・4 そうです。

豚1 皆さんがそう言うならそうなんでしょう。

豚2 行きたくないなあ。

豚3 でも行かなくちゃ。

豚4 あたし達には、それぞれに行きたい場所も行かなくちゃいけない場所もあるだろう

けど、行かざるを得ない場所がある限りそのざるに行かざるを得ないでしょう。

豚1 残酷な事実ですけど、僕の肉が、骨が、そうしろそうしろと急かします。

豚2・3 その通りだ。

豚4 でももう少し立ち止まるくらいは、

工場が豚達の尻を強く叩く。

豚達 駄目みたいだ。行きます、行きますから、そんなに怒らないでよ。

豚達はまた歩き出す。
赤頭巾ちゃんは、立ち止まったままだ。

豚達、工場の口の中に入っていく。
ゲートがピシャリと閉まる。
赤頭巾ちゃんはそれを無感動に見つめ、耳を塞ぐ。

間。

豚達の断末魔。
工場のゲップ。

沈黙。

赤頭巾ちゃん、花束の匂いを嗅ぐ。

赤頭巾ちゃん いい匂い。誰にもあげない！

赤頭巾ちゃん、ゲートの向こうに花束を投げ込み、ケラケラと笑う。

赤頭巾ちゃん あれが石だったら、あれが手榴弾だったら、あれがダイナマイトだったら、あれが核爆弾だったら、なにか、変わったのかな？ なにか、変えられたのかな？
んなわけないか。ああ、こうして世にすれた惨めな赤頭巾ちゃんは、さめざめと泣くのでした、シクシク。なんてね。(ケラケラ笑う)

赤頭巾ちゃん、向こうから誰かが歩いてくるのに気付く。
しばし考え、物陰に隠れる。

なにこともなかったかのように、守衛室の明かりがつく。
その中から、警備員のイビキが聞こえる。

本編が始まる。

オープニング終わり。

本編

男がキョロキョロ、オドオドとやってくる。

男は工場の前を何度かウロウロし、警備員が寝ていることを確認してから、チャックを下ろし、工場のゲートに立ちシヨンをする。

緊迫の放尿時間。

男は無事出し終え、少し体を震わせてから、チャックを閉める。

男 ざまあみる豚所長め。共食いはたいがいにしろ、ぺっ！

男は誇らしげに胸をはり、去ろうとする。

が、気付くと目の前に赤頭巾ちゃんがいる。

男、大声をあげそうになるが、警備員の存在を思い出し、なんとか堪える。

赤頭巾ちゃん こんばんは。

男 こ、こんばんは。

赤頭巾ちゃん いっぱいいっぱいだったの？

男 え？

赤頭巾ちゃん 男の人のほうが女の人よりずっと立ちシヨンがしやすい。でも不思議だね。おしっこを我慢するのは女の人のほうがずっと難しいのに、何故か立ちシヨンをするのは男の人のほうが簡単。

男 あんまり女の子が立ちシヨン立ちシヨんで。

赤頭巾ちゃん ざまあみる豚所長め。

男 うっ。

赤頭巾ちゃん 共食いはたいがいにしろ、ぺっ！

男 き、聞いてた？

赤頭巾ちゃん クツキリ聞こえたよ、おじさんのおしっこの音とカッコいいあのセリフ！

男 お、大声は。

赤頭巾ちゃん ね、もう一回言っつてよ。

男 は？

赤頭巾ちゃん あのセリフ。

男 えっと。

赤頭巾ちゃん お願いしまーす！

男 分かった！ 分かったから、静かに、ね？

赤頭巾ちゃん はーい。

男 い、一回しかやらないからね？

赤頭巾ちゃん 待ってました！

男 えーっと。(コホン) ざまあみる豚所長め。共食いはたいがいしろ、ぺっ！

赤頭巾ちゃん 俺は食われるだけの羊じゃねえ。羊の皮を被った狼なのさ！ シャキーン！

(格好いいポーズをとる)

男 しゃ、シャキーン。(照れながら真似をする)

赤頭巾ちゃん もっかい、もっかいやって！

男 さっき一回だけって。

赤頭巾ちゃん 父ちゃんおかわり！

男 分かった。(コホン) ざまあみる豚所長め。共食いはたいがいしろ、ぺっ！

赤頭巾ちゃん いいねいいね、着信音にしたいくらいだよ。

男 い、いやあ、人生ではじめてだよ、こんなに褒められたの。

赤頭巾ちゃん はあー、灰色の人生を歩んできたのね。

男 そ、うだね。うん、改めて考えるとその通りだ。

赤頭巾ちゃん おじさんは羊？ 狼？

男 え？

赤頭巾ちゃん 誰かに言われたとか誰かに決められたとかそういうつまんないのじやなく

て、おじさんは自分を、しゃぶられる羊だと思う？ それとも、しゃぶる狼だと思う？

男 きゅ、急になにを。

赤頭巾ちゃん むかーしの歌にさ、男は狼なのよ、的なの？ そういうのがあるらしいんだ

けど、なんでもかんでも、男はみんなそうさ！ とか、女はみんなああだ！ みたいに

でっかい分母でくくっちゃうのはどうなのかな、って思うの。だから確かめたいんだ

よ、あたしの目の前にいる、間違いなく男のおじさんがどうなのか。

男 あんまり、男にそういう風な言葉を言うの、よくないよ。

赤頭巾ちゃん どうして？

男 どうしてって、君ほんとは分かって言ってるだろ。

赤頭巾ちゃん どうでしょう？ ふふ。

男 とにかく、私はもう行くから。

赤頭巾ちゃん ざまあみる豚所長め。

男 ……。

赤頭巾ちゃん 共食いはたいがいしろ、ぺっ！

男 おどして、るのかい？

赤頭巾ちゃん さあ、どうでしょう？ ふふ。

男 あ、あの。ちよつと今手持ちが少ないけど、これで、

赤頭巾ちゃん お金はいらない。

男 え？

赤頭巾ちゃん お金なんて死んだらなんの役にもたないわ。

男 でも生きていくためにはいるでしょ。

赤頭巾ちゃん あたしが生きてがっているように見える？

男 そりゃ、君ぐらいの年が人生で一番楽しいころなんだから。

赤頭巾ちゃん おじさんはそうだったの？ これまでの人生を灰色だと振り返るおじさん

は。

男 ……。

赤頭巾ちゃん あ、泣きそう？

男 うるさい。

赤頭巾ちゃん (工場に) うるさいって！ いちいち泣くなって！

男 おい！

誰かの声と靴音が聞こえる。

二人、そのほうを見る。

赤頭巾ちゃん 内緒ね。

男 へ？

赤頭巾ちゃん あたしが、ここにいるって。

赤頭巾ちゃん、隠れる。

男 え、え、え。ちよつと、なにかから内緒にするの？

老婆が、詩を歌いながらやってくる。

老婆 こんな夜には 思い出す

老婆 なにに？

男 た、確かにあなたの美声は素晴らしいと思います。でも、こっちのコンディションが万全の時じゃないと、もったいないなあ、って。

老婆 もったいない？

男 は、はい。

老婆 あんた。

男 ……。

老婆 分かっくんじやないの。

男 ありがとうございます。

老婆 いやね、ほんとはあたしも大劇場に立って、いっぱいのお客を睨みつけ、スポットライトを浴びながら歌を歌う歌姫になるはずだったんだよ、若いころ、いや、若いころから。でもね、その宿命を運命が邪魔しくさって、こんちくしょう！ てなもんさ。

男 は、はあ。

老婆 けれどそんなあたしも腹は減る。夢だけじゃ腹は膨れないからね。だから、ここからちよつとおこぼれを貰ってんのさ。豚を肉に、夢を現実にする魔法の工場から、豚骨をちよつとだけね。

男 と、豚骨？

老婆 そう、豚骨、豚の骨。あれで歯をシーシーするとね、豚の甘みが口に広がって、米が進むんだよ、米があ。まあ、週三で通ってるね。あ、これ味なくなったやつ。(懐から豚骨を出す)

男 ばっち。

老婆 でも時々我に返るんだ。豚骨で歯をシーシーする歌姫がどこにいるの？ おとぎ話でも見たことないよ！ いや、ここにいるんだけど、やっぱり惨めで涙が出ちゃう、だって、女の子だもん。

男 そ、そうですか。頑張ってください、それじゃ。

老婆 お待ちな、豚骨は？

男 い、いらぬです。

老婆 それなら花はどうだい？

男 花？

老婆 やっぱり興味持ったね、発電所。

男 発電所？

老婆 発電所が石炭食って電気を生むように、あんたは花を食って電気を生んでんだろ。

男 私はピカチュウじゃありませんよ。

老婆 比喩表現だよ、実際に電力を生んでるわけじゃない。電力に相当するものを生んでるんだ、人間一人のモーターをブンブン動かすようなとんでもないエネルギー。あんたは狭いアパートで一人寂しく、それを生んでいる。

男 は？

老婆 それを助ける花を売ってあげよう。そう、あたしは言ってるんだよ。

男 ひよっとして、発電所って、そういう意味？

老婆 あたしはあんたじゃないから、百パーセントそうとは断言できないけど、おそらくそう、とは言えるね。ねー、豚骨君。

男 セクハラだ！

老婆 セクハラがなくちゃガキが生まれねえだろうが。

男 セクハラお婆さん、私がお巡りさんに駆け込む前に、とつとどっかに行っておさかい。私ももう帰りますけど！

老婆 警察があんたの味方だなんて、誰が言った？

男 え？

老婆 あんたはまだまだ世の中の仕組みが分かってないねえ。(高らかに笑う)
声 うるせえぞおいつ！

心地よい眠りを邪魔され怒り心頭な警備員が、顔を真っ赤にして出てくる。

男は非常に動揺するが、老婆は我関せずと、豚骨で歯をシーシーしたりする。

警備員 何時だと思ってるんだ！

男 あの、その。

警備員 こんな時間に、馬鹿みたいに、酒と煙草を覚えたての大学生みたいに、騒いでいて思ってるのか？ それとも今を、昼間の一時と勘違いしてるのか？ どっちだ、答えてみるてめえ。

男 すいません。

警備員 すいませんしか言えねえのか？

老婆 ごめんなさい、ならどうだい。

警備員 いくらかマシかもな。

男 ごめんなさい。

警備員 ああ、確かにマシだ。

老婆 あたしには演出家の才能もあったらしい。

男 よかったよかった、ごめんなさいごめんなさい。それでは、もう行きますので。お休

みのところたいへん失礼を、

警備員 どこへ行くこうってんだ？

男 家です。

警備員 俺の安眠を邪魔しておいて、自分は快適な我が家で布団に入っておやすみなさ

い、ってか？ そいつは虫がよすぎるからお。

男 でも、さっき許してくれるって。

警備員 いつ許したなんて言ったよ。俺は、いくらかマシだ、つっただけだ。

老婆 そうだそうだ、人の話はちゃんと聞きなあ。

男 あなたはこっち側でしょ？

老婆 あたしはこっち側だよ、ねえ？

警備員 ババア、てめえはそっち側だ。こっち側には俺と工場があるばかりだ。

老婆 そんないけいわずう。

男 け、警備員さん！

警備員 なんだ、サンドバック。

男 ひっ！ じゃなくて、そのお婆さん、豚骨が欲しいみたいですよ。

老婆 馬鹿！

警備員 なに！ 豚骨！

老婆 わ、悪いかい、乙女が豚骨欲しがっちゃ。

警備員 お前、ラーメン屋か？

老婆 そう見えるか、この細腕前にしても。

警備員 行列店の店主ほど、腕は細いもんだ。

老婆 そうなの？

男 心当たりがないでもないです。

老婆 どっちだ。

警備員 いいだろう、その挑戦受けて立つ。

男・老婆 いつ挑戦したの？

警備員 ババア、お前にこの豚骨を使う権利があるか、試してやる。

老婆 試さないで試さないで。

警備員 なに、遠慮すんな。俺は今でこそ豚バラよりも安いごろつきだが、昔は豚骨と一緒に汗を流したこともある。まあ、修行先で色々あって豚骨とは別れたけれど、あいつとの思い出は今もここに。あいつを何度も砕き、あいつに何度も砕かれたこの肩甲骨に！（肩甲骨を指す）

男 ち、ちなみに試すって、どんなことを？

警備員 簡単だ。まずはそいつが豚骨よりも骨があるかを試すために。

男・老婆 試すために？

警備員 骨髓垂れるまで砕き割る！ なに大丈夫大丈夫、豚骨への愛さえあれば致命傷なんて、

老婆 付き合ってもらえるかあ！（脱兎のごとく逃げ出す、その拍子に豚骨を落とす）

警備員 待て！ お前の情熱はそんなものかあ！ ん？（豚骨を拾い、匂いを嗅ぐ）これはまさしく、いい豚骨。ババア！ お前にはやはり才能があるぞお！（ライオンのように追いかける）

男はひとり、ポツンと残される。
突然の尿意。

どこかで用を足そうと考えるが、近くにコンビニも公衆便所もないことを思い出す。悩んだ末、さきほどとは逆のほうに、チャックを下ろし、立ちション、する前にもう一度辺りをうかがってから、立ちションする。

赤頭巾ちゃん、ひよっこり現れて、男を傍から観察する。

緊張からほどかれた末の、放尿時間。

男は無事出し終え、少し体を震わせてから、チャックを上げる。

男 （一瞬ためらいながらも）ぎ、ざまあみる豚所長め。共食いはたいがいにしろ、

赤頭巾ちゃん・男 ペっ！

男 うわっ！

赤頭巾ちゃん えへへ。

男 し、しまう前だったら大変なことになってたよ！

赤頭巾ちゃん ごめんごめん。

男 ああ、ほんとに、ビックリして心臓止まるかと思った。

赤頭巾ちゃん おじさんはどれくらいの心臓を止めたの？

男 え？

赤頭巾ちゃん ここで、あたし達が食べるお肉の候補生の。

男 ……。

赤頭巾ちゃん 流石にお魚はここでは死なないよね。だって、生臭いし、小骨も多いし。

それにあの濁った目で見つめられちゃ、皆モジモジしちゃって、仕事にならないよね。

あ、でもそうか、牛にも豚にも鳥にも目玉はあるもんね。そういう意味なら一緒かあ。

で、実際どうなの？ 死んだ魚、死んだ牛、死んだ豚、死んだ鳥、どれに見つめられるのが一番こたえるの？

男 (吐きそうになる)

赤頭巾ちゃん ちょっとちょっと。まさか、生きてるあたしに見つめられるのが一番こたえるって言うの？ 失礼しちゃうなあ。

男 やめて、やめて。

赤頭巾ちゃん やめたげない。だってあたしは見ていたんだもん、おじさんを。

男 もう勘弁してくれ。

赤頭巾ちゃん 肉と骨を引きはがされるのって、どんな気持ちなんだろうね。ああ、豚骨

と豚肉に引きはがされた悲しき豚よ。でも安心して、ラーメンになればチャーシューとスープとして再会できるから。あ、塩ラーメンだったらごめんね？

男 楽しいかい、こんな惨めな私をいじめて、

赤頭巾ちゃん おじさんはしたことある？

男 なにを。

赤頭巾ちゃん とぼけないでよお。

男 とぼけるもなにも。

赤頭巾ちゃん おじさん以外みんなやってることだよ。

男 は？

赤頭巾ちゃん おじさんのお父さんもお母さんもやってることだよ。

男 ……。

赤頭巾ちゃん おじさんの初恋の人がおじさん以外の人とやってることだよ。

男 ……。

赤頭巾ちゃん はい問題！ この文脈での、やってる、とは、なにをやってる、という意味

味でしょうか！ シンキングタイムはハツカネズミの一生。正解者にはとっても苦い花の蜜！

男 あのさ。

赤頭巾ちゃん はいおじさん！ 答えをハキハキどうぞ。

男 そうやって、男をからかうようなことばかりしていると、後悔するぞ。

赤頭巾ちゃん じゃあ女をからかっても後悔はしないの？

男 揚げ足をとるな！

赤頭巾ちゃん フライレグ！ あはははは！

男 いい加減にしないと、

赤頭巾ちゃん あ！ さっきみたいによろしく。

男 もう君に付き合う義理は、

赤頭巾ちゃん、男の頬に軽くキスをする。

男 へ？

赤頭巾ちゃん ふふ、魔法のキス。よろしくね。

赤頭巾ちゃん、また隠れる。

男、キスされたところを触り、撫で、モジモジする。

白頭巾ちゃんが、トボトボと歩いてくる。白頭巾ちゃんは頭に、雪のように真っ白な頭巾を被っている。

その姿は、歩く西洋人形のような。美しいが、冷たく暗く、もろい。

男、見とれる。

男 (思わずため息が漏れる)

白頭巾ちゃん (男と若干距離をとり) あ、あの。

男 あ、は、はい。

白頭巾ちゃん ここに、その。その、あの、女の子？ え、つとお姉ちゃんが。来ませんでしたか？

男 も、もう一回。

白頭巾ちゃん は、はい。お姉ちゃん、です。私と全然似ていない、太陽のようなおおらかさを持ちながらも、月のように神秘的なお姉ちゃんです。

男 見た目の特徴はある？ ひとり、心当たりがないこともないんだけど。

白頭巾ちゃん 見た目、見た目ですか。あの。

男 うん。

白頭巾ちゃん 人を見かけで判断する人ですか、あなたは。

男 いや、そんなことはないけど。

白頭巾ちゃん そ、そうですか。ごめんなさい、失礼なこと言っちゃって。

男 いや、そんな謝らなくても。(一歩近づく)

白頭巾ちゃん (二歩下がる)

男 え？

白頭巾ちゃん ご、ごめんなさい！ その、私、男の人が怖くて。いつか近づかなきゃいけない、と思いつつも、体は言うことを聞かず、一歩近づかれると二歩、五歩近づかれると十歩、下がってしまうんです。なので決して、あなたが臭いから、とか、あなたが汚いから、とか、あなたが嫌いだから、とかそんな理由ではないんです。全部、私の弱い精神と、私の臆病者の体が悪いんです。だからどうか、大きな声は、大きな声だけはやめて下さい。

男 出さない出さない、私も、大きな声は嫌いなんだ。それに、異性が怖いって気持ちは分かる気がするよ。

白頭巾ちゃん ありがとうございます、ご理解いただき。

男 いえいえ。

白頭巾ちゃん それで、その。あなたがご想像されてる、心当たりがあるかたは、どんなかたですか？

男 え？ そうだな。……無邪気なんだけどいじわるで、可愛いんだけど残酷で、人懐っこいけどわがままで、どこか人を試すようなところがある、そんな子だね。いや、会ったばかりだからあの子の爪の形も血液型も知らないんだけど！ 多分、そんな子だ。

白頭巾ちゃん 優しくしてあげて下さい。

男 ？

白頭巾ちゃん お姉ちゃんは優しさに似たものは知っていますが、優しさを知りません。お姉ちゃんは愛に似たものは知っていますが、愛を知りません。これまでもずっとそうで、きつとこれからもずっとそう。それでも妹としては、お姉ちゃんに幸せになつて欲しいんです。

男 優しくもなにも、私はむしろあの子にちよっかいだされてるだけで、

白頭巾ちゃん 買ったんですよ？

男 ……。

白頭巾ちゃん 買ったんですよ？

男 どういうこと？

白頭巾ちゃん あなたのようによしそうな人でも、買うんですね。

男 詳しく話を、

白頭巾ちゃん 一息に息を断たれて、もの言わぬ肉になれば、幸せを決して感じることは出来ないけれど、不幸せも感じずにすむのに。こんな惨めな気持ちに溺れることもないのに。私達は、息を断ってさえもらえない。

男 君は。

白頭巾ちゃん あと、ひと月です。正確には二十二日後。私もお披露目されます、お姉ちゃんと同じように。だから祈るんです、お姉ちゃん幸せになって、つて。そうすれば私も、ひよつとしたら幸せになれるかもしれないから。打算的な自分がとても醜く感じますしそう映るのは当然だと思うけれど、それでも生きていく限り、私はどうしてもそんな風にしか考えられないんです。

男 君達は！

白頭巾ちゃん ごめんなさい狼さん！

男 ……。

白頭巾ちゃん 男の人の大きな声は、荒野の狼の遠吠えのように聞こえて、私のような弱虫には、怖くて、しようがないんです。どうしようもなく、体が震えてしまうんです。

ごめんなさい、ごめんなさい、だから、大声だけは……。

男 ……ごめん。

沈黙。

白頭巾ちゃん ごめんなさい。もう、行きます、お邪魔にならないように。でも、お願いです、どうか、お姉ちゃんには、優しく、優しく、優しくしてあげてください。手折るようなことは、しないであげてください。たとえお姉ちゃんが、そう望んでも。

白頭巾ちゃん、静かに降る残酷な雪のように、ぼそぼそと詩を歌いながら去る。

白頭巾ちゃん 一枚二枚 散る度に

ビクビクビクと 己抱く

三枚四枚 散る度に

己の番だと 空を見る

この世のどこにも 母はない

昨日の晩には 父が来た

この世のどこにも 私はない

この世のどこにも いられない

この世のどこにも いられない

いじみで。

白頭巾ちゃん、去った。

男、呆然と立ち尽くす。

赤頭巾ちゃんは、そんな男に寄り添うように立っている。

赤頭巾ちゃん いい子でしょ？

男 ……。

赤頭巾ちゃん ルックスはもちろん、性格だっていいのよ？ ちょっとそそっかしいところ

ろはあるけどね。でも、自慢の妹なの。おお妹よ！ 不肖の姉に似ず、よく立派に育つ

た、褒めてつかわす！ みたいな、あははは。

男 警察に行こう。

赤頭巾ちゃん ん？

男 事情を話せばきっと助けになってくれるよ。大丈夫、この町のお巡りさんは熱心だから、

ら、

赤頭巾ちゃん 熱心に花を買うのね。

男 え？

赤頭巾ちゃん 多分、おじさんよりもあたし達のほうがお巡りさんのことよく知ってるよ。

男 そんな、そんな。

赤頭巾ちゃん そんなつまんないことじゃなくて、もっと別の話をしようよ。たとえば、

おじさんの話とか。

男 いや、それでも。

赤頭巾ちゃん おじさんはなんでここやめることにしたの？

男 それどころじゃないだろ！

赤頭巾ちゃん その手が真っ赤に染まったから？ それが落ちなくなったから？ それで

気が狂うほどには恥知らずじゃなかったから？

男 いや、その。

赤頭巾ちゃん おじさんはどれくらいお肉にしたの？

男 ……。

赤頭巾ちゃん どれくらいのお肉を食卓に届けたの？ おじさんはその手で。

男 (吐き気を覚える)

赤頭巾ちゃん 自分でしめた豚の味を覚えると他所の豚なんて不味くて食べれない？

男 (吐きそうになる)

赤頭巾ちゃん そう言えば最近、食べてないなあ。ね、なんかいい見極め方あったら教え

てよ。スーパ―で実践するからさ。

男 なんだ。

赤頭巾ちゃん ん？

男 ベジタリアンなんだ！

赤頭巾ちゃん 豚所長が？

男 私が！

赤頭巾ちゃん へー。

男 ……好きだった、肉が、子供の頃から、野菜よりも、魚よりも、お菓子よりも、肉

が。がつがつ食べた、それこそ豚のように、牛を、豚を、鳥を、たまに羊を。その中で

も特に、豚が好きだった。だから、最初は軽い気持ちだったんだ。工場で働けば、さば

きたての、特にうまい豚を、あわよくば生レバーを、食べられるって、だから、この

面接を受けた。面接官はあの豚所長だった。あいつが言うんだ、豚は好きかい？ っ

て。

赤頭巾ちゃん 好きです。

男 そう言った。そしたらあいつはタバコのヤニで真っ黄色になった歯をむき出しにして。

赤頭巾ちゃん 採用。

男 そう言った。

赤頭巾ちゃん やっぱ豚に愛情を持っている人間じゃないと、豚をおいしくさばけないからね。

男 そう言った。だから私もこう言った、はい、この工場、いや、世界で一番豚が好きな男になってみせます。

赤頭巾ちゃん そう言った。

男 そう言ったんだ。

赤頭巾ちゃん いいじゃない、草食系男子よりもそっちのほうがずっと受けがいいよ。

男 いいもんか！ 豚が、目の前を歩くんだ、ちよつと臭いんだ、それにちよつとイラツとするんだ、その憂さを晴らすように、その豚を、豚を、豚を、豚を、しめ、しめ、しめ、

赤頭巾ちゃん 殺す。

男 しめる！

赤頭巾ちゃん 殺す。

男 しめるんだ！

赤頭巾ちゃん 殺す。

沈黙。

男 そう、殺す。今から殺す豚と目が合う、その目が潤んでる、時々涙を零す豚がいる、その豚を、殺す、そう、殺す、目が合ったまま。そらしたくてもそらせないあの目。あの目ほどの曇り空を私は知らない……。私は本当に、馬鹿だった。しめる、という言葉が、殺す、という意味だということを、分かった気でいて本当はなにも分かつちやいなかった。

赤頭巾ちゃん 安心しなつて、人生分かんないことの方が多いから。

男 どうしてそんなことが分かるんだ。

赤頭巾ちゃん 分からないからだよ、分からないから、分からないが分かるんだ。

男 科学と学習みたいなこと言つてごまかさなだけでくれ。

赤頭巾ちゃん ふふ、バレちゃしようがねえ。あたし、八割は適当に喋ってるからね。

男 だろうね。

赤頭巾ちゃん 残りの二割はヒヤリとする真実。そう自負しております。

男 その二割で私はこんなに傷ついてるんだ。

赤頭巾ちゃん ごめんてば、ごめんごめん。あ、これ八割の方ね。

黒頭巾がいる。

黒頭巾は非常に体格がよく、ボロボロの黒い頭巾と服を着て、片手に斧を持っている。

赤頭巾ちゃん やっほー。

黒頭巾 あんた。血色の悪い、骨離れも悪そうなあんた。

男 な、な、な、なんですか？

黒頭巾 買ったのかい？

男 へ？

黒頭巾 花をさ、あんたのそばの真つ赤な花。買ったのかい？

男 あ、いや。

黒頭巾 買ってないのか、そうかそうか。買ってないんじゃないな。

赤頭巾ちゃん 売ったの、あたしが。

黒頭巾 婆ちゃんに報告は？

赤頭巾ちゃん しないほうが都合良いこともあるでしょ？

黒頭巾 同感、と言ってやりたいが、そうもいかない。俺には俺の仕事がある。しつけないってない、ルールも守れない狼の腹をかつさばき、石ころ詰めて井戸に落とすのが俺の仕事だ。

男 ひっ！

黒頭巾 そこをどけ。すぐすますから。

赤頭巾ちゃん なにか勘違いしてない？

黒頭巾 なにを？

赤頭巾ちゃん このおじさん、狼に見える？

黒頭巾 ん？

男 へ？

赤頭巾ちゃん お兄ちゃんの仕事は狼のお腹をかつさばくこと。分かる分かる、立派な仕事だと思っよお。

黒頭巾 思ってもないことを言うな。

赤頭巾ちゃん でもさ、そのどんな凶暴な狼でもぶち殺す斧で、羊を殺しちゃうのはどうなの？

男 ひ、羊？

黒頭巾 続ける。

赤頭巾ちゃん 餅は餅屋、牛井は牛井屋、狼殺しはお兄ちゃん。てことはつまり、羊を殺すのは羊屋さんの仕事じゃないかなあ。

黒頭巾 その証拠は？

赤頭巾ちゃん ベジタリアンなんだって、おじさん。

黒頭巾 理由として弱すぎるな、もういいだろう。

男 ひ、ひ、ひ。

赤頭巾ちゃん ここで働いてるのに。

黒頭巾 ん？

赤頭巾ちゃん よだれが垂れるほどおいしそうな、さばきたてホヤホヤの豚が目の前にあるのに、むしろそれに吐き気を覚える程の筋金入りのベジタリアンなんだよ、おじさんは。凄いでしょ？ 自分でバラバラにした豚を、涙と鼻水ダラダラ垂らしながらバックに詰めてラベルを貼ってたんだよ、おじさんは。ヤバいでしょ？ そんなおじさんが狼なんて、そう思うやつはとんでもない間抜けかめくらだよ。

黒頭巾 悪い言葉を使うな、きらう客もいる。

赤頭巾ちゃん でも好きな客もいる。

黒頭巾 (気味悪く笑う)

赤頭巾ちゃん (不気味に笑う)

男 あ、あの。

黒頭巾 おい。

男 は、はい。

黒頭巾 さっきの話は本当か？

男 え？

黒頭巾 お前は、自分が食べるわけでもない豚を殺した金で飯を食ってきたのか？

男 あ、う、あ。

赤頭巾ちゃん そうでーす！

黒頭巾 お前には聞いてない。

赤頭巾ちゃん そうだよね、おじさん？

男 あ。

赤頭巾ちゃん なにも難しいことは言わなくていいよ。おじさんはただ、はい、そうです。それだけ言えばいいの。

黒頭巾 それで、どうなんだ。

男 ……。

黒頭巾 お前は、自分が食べるわけでもない豚を殺した金で飯を食ってきたのか？

涙も零れぬ、ジクジクとした沈黙。

男 はい、そうです。

黒頭巾 本当だな？

男 はい、そうです。

黒頭巾 そうか、お前は羊だな。羊の中でも特にずる賢く悪辣な羊だ。

男 はい、そうです。

赤頭巾ちゃん 言ったとおりでしょ？

黒頭巾 ああ、悪かったよ。

赤頭巾ちゃん それじゃバイバイ。お邪魔虫はあっちいけー。

黒頭巾 あんた。

男 ……。

黒頭巾 せいぜい自分を大事にしな、自分のいちいちに幻滅しながら。しかし、ふふ、本

当に、ふふ、骨のないやつだ、硬い骨の一本もない、骨にすら見捨てられたやつだ。

(気味悪く笑う)

黒頭巾、去っていく。

赤頭巾ちゃん バイバイ。いやあ、危機一髪だったね。お兄ちゃん、腕つぶしがとって

も強いから、おじさんなんて、プチッ！ とされるところだったよ。一回見たことある

けど、中々スプラッターだからね。あ、でもおじさんは見慣れてるか。だって、

男 黙れ！

男、「狼」のように赤頭巾ちゃんを組み伏せる。

赤頭巾ちゃん (これっぽっちも怯えずに) わお。きゃー食べられちゃう。

男 黙れ、黙れ！ 誰が、羊だって、なにも出来ない、ただ食い物にされるだけの、羊だって、誰が！

赤頭巾ちゃん 違うの？

男 違う！ 私は、私は、お、お、狼だ！ 食いものにされてるんじゃない、食い物にしてるんだ、き、きた豚を肉にして、骨にして、売って、金にして、それで、飯を食べてる。そうだ、食い物を食いものにして私は生きてきたんだ！ 私にはある、骨が、硬い骨が！ 骨なしなんかじゃない、私は骨なしの、食いものにされるだけの畜生じゃない！

赤頭巾ちゃん おじさん。

男 違う、私は、食いものなんかじゃ、食いものにされてなんか……。

赤頭巾ちゃん とれる？

男 え？

赤頭巾ちゃん (頭巾をしめして) これ。

男 え？

赤頭巾ちゃん とれる？ ちょっと無理かなあ。

男 とれるさ、とってやる！ こんなもの！ (頭巾に手をかける)

男、どうしても赤頭巾ちゃんの頭巾がとれない。

赤頭巾ちゃんはそれを茶化すでもなく、ただ見つめる。

男と赤頭巾ちゃん、はじめて本当の意味で目が合う。

男、情けない声を出して赤頭巾ちゃんから離れて、工場のゲートにすがりつく。

赤頭巾ちゃん (起き上がって) あーあ、残念。

男 ごめん、ごめんなさい、ごめん……。

赤頭巾ちゃん 気にしない気にしない。もっかいやろうよ、ネバーギブアップ！

男 私は、なんてことを。

赤頭巾ちゃん あたしはその、なんてことをして欲しいんだけどなあ。

男 ……。

赤頭巾ちゃん なんてことなんて、なんてことないよ。

男 そういうこと、には、なにか、よく分からないけど、愛、のようなものがなくちゃ。
赤頭巾ちゃん あはははははは！ なにおじさん、シーラカンス？ 狼でも羊でもなく、大
穴お魚なの？ あははははははは！

男 君、いや、君達は、

赤頭巾ちゃん 愛なんてしよっぱいものがなくなっちゃって大きくなるし、濡れるもんだって。

男 ……。

赤頭巾ちゃん しかし笑ったなあ、五年に一度の大笑いだよほんと。ありがとうね、笑わ
せてくれて。

男、ものすごく大きな動作で財布を取り出し、中を漁る。

赤頭巾ちゃん え、ど、どうしたの？ 流石のあたしでもびっくりしちゃうんだけど。

男 二千五百円しかない。

赤頭巾ちゃん は？

男 コンビニに行くこう。さ、早く。(赤頭巾ちゃんの手を掴みコンビニに行くこうとする)

赤頭巾ちゃん (振りほどき) 痛いってば！ (男に平手打ちする)

男 いたっ！

赤頭巾ちゃん 目エ覚めた？

男 逃げ出そう、そのためにコンビニに行くこう。

赤頭巾ちゃん 人間にも分かるように言ってくれろ？

男 貯金はそれなりにあるんだ、だからATMに行つて下ろそう。それで外国、は流石に
無理だけど、違う町になら行けるよ。だから、

赤頭巾ちゃん バスで？

男 え？

赤頭巾ちゃん バスで行くの？

男 どうだろう、基本的には電車のほうが安いと思うけど。

赤頭巾ちゃん ばーか。

男 へ？

赤頭巾ちゃん どこへ行くっていうの？ どこへ行けっていうの？ どこへ行ったってな
にも変わらないのに。それでもおじさんは行けっていうの？ このしけた豚の墓場か
ら、どこかにあるかもしれない人類みな兄弟の頭のラリッたパライソへ？

男 君はまだ若い、私なんかより、あのお婆さんよりもずっと、未来が、そう！ 未来があるんだ。明るい未来とまでは断言できないけど、それでも未来がある。そんな、大人達に不当に搾取されることはないんだよ。いや、そんなことはあっちゃいけないんだ！

赤頭巾ちゃん 不当ってあれ？ 船が来るところ？ なんか格好いい水兵さんがよく分かるんない黒いやつに足置いて、

男 ふざけないで、

赤頭巾ちゃん ふざけてんのはおじさんだよ！

男 え？

赤頭巾ちゃん 勝手に同情すんなよぶつ殺すぞ。

男 ……。

赤頭巾ちゃん おじさん、あたし分かっちゃった。おじさんは羊じゃない、豚だよ、ここにいる豚達と一緒に。去勢された豚さん、それがおじさんだよ。

男 は？

赤頭巾ちゃん 違うと思う？ 言葉を震わせることなく、私は豚じゃない、去勢なんてされていません！ って強く強く言い切れる？ そう言い切れるんだったら、謝るよ、言い切れるんならね。

男 ……。

赤頭巾ちゃん 分からないから、分からないが分かるんだ。あたしは優しさが分からない、あたしは愛が分からない。認めるよ、はいそうです！ だから分かる。おじさんは去勢された豚、だから優しさだの愛だの未来だの陳腐でありがたあいものを押むんだ。自分じゃ奮い立てなくなっちゃってるから、上っ面の言葉や他所の誰かさんにすがるんだ。まるでクモの糸にすがるゾンビだね。切れちゃうと分かってもすがっちゃう。それってとっても悲しくて、とってもズルいよね。

男 わた、しは。

赤頭巾ちゃん なんて、ね。

男 え？

赤頭巾ちゃん ごめんごめん、お説教みたいになっちゃって。キャラじゃないよねこんな。可憐にして軽やかなあたしらしくなかったなあ、反省反省。さっきの意味不明な寸劇も、不器用なおじさんなりに謝罪の意味を込めてたんだよね？ 悪い事したなあ、謝罪を無碍にしちゃいけないって教わってるのに。あ、誰にとは聞かないですよ？ とって

もセンチティブな問題だから、あはは。

男 今のは。

赤頭巾ちゃん ん？

男 八割？ それとも、二割？

赤頭巾ちゃん どうでしょう？

白頭巾ちゃん、息を切らせてやってくる。

白頭巾ちゃん お姉ちゃん？ お姉ちゃん！ どこに、どこにいるの？ 助けて、助けて、助けて！

赤頭巾ちゃん こーら、夜中にそんな大声出しちゃ駄目だよお。

白頭巾ちゃん お姉ちゃん！（赤頭巾ちゃんにすがりつく）

赤頭巾ちゃん おーおー、どうしたの？ こんな真夜中にこんなに情熱的に。

白頭巾ちゃん それが、それが。

赤頭巾ちゃん 慌てると語彙力が死ぬのは悪い癖だって。ほれ。（白頭巾ちゃんの鼻をつまむ）

白頭巾ちゃん んむ。

赤頭巾ちゃん あ、おじさん、やらしいこと想像したでしょ。もうエッチ。

男 ちが、そんなこと私は！

赤頭巾ちゃん ムキにならないでよ、こつちが恥ずかしい。

白頭巾ちゃん （鼻声で）お姉ちゃん。

赤頭巾ちゃん 落ち着いた？

白頭巾ちゃん （鼻声で）うん。

赤頭巾ちゃん よしよし。（鼻を離す）

男 私はそんな、豚なんかじゃ。

赤頭巾ちゃん で、なに？

白頭巾ちゃん それが！

赤頭巾ちゃん （鼻をつまむ構え）

白頭巾ちゃん そ、その、お婆ちゃんに会って。

赤頭巾ちゃん あ、最悪だね。出先で身内に会うって最悪だよねえ。

白頭巾ちゃん うん。てそうじゃなくて、お披露目が、お披露目が。

赤頭巾ちゃん ん？ 来月の？

白頭巾ちゃん 明日に、明日にするって！

赤頭巾ちゃん あちゃー、そうなの。ますます最悪だね。

男 そんなの、最悪じゃないか。

赤頭巾ちゃん おじさんもそう思う？

男 最悪なのか、私は。

赤頭巾ちゃん あ、自問自答してんのね。

白頭巾ちゃん あたし、どうすれば。

赤頭巾ちゃん どうしたい？

白頭巾ちゃん え？

赤頭巾ちゃん あんたはどうしたい？

声 そこでなにをしている！

赤頭巾ちゃん お、怖い怖い狼さんかな？

白頭巾ちゃん ひっ！

赤頭巾ちゃん おじさんおじさん。

男 あ、え、つと、なに？

赤頭巾ちゃん どっか隠れるとこない？

男 そ、それなら、工場の中は？

赤頭巾ちゃん ナイスアイデア。さ、入った入った。

白頭巾ちゃん え、え、え？

赤頭巾ちゃん 遠慮しないで。

赤頭巾ちゃん、ゲートの向こうに白頭巾ちゃんを押し込む。

赤頭巾ちゃん これでよしと。

男 あ、あのさ。

赤頭巾ちゃん ん？

男 わ、私のこと、どう思う？

赤頭巾ちゃん 純情な女子高生かあんたは。

声 動くな、動くなよお！

赤頭巾ちゃん さっきから一歩も動いてないって。

豚所長が、汗を滝のように流しながら、息切れして走ってくる。

豚所長 は、ハエだな？ お前らは、ハエだな？ 肉の周りを飛び回る、憎たらしい、ニクバエだな？ キンチョールを持って来てやろうか！

男 あ！（思わず隠れる）

赤頭巾ちゃん おじ様はドがつく近視なの？ 目医者に行ったほうがいいレベルの目の悪さだけど。

豚所長 む。おやおやお嬢さん、これは失礼しました。あなたのような真珠をハエと間違えてしまうなど、一生の不覚！ このこの！（自分の頭をポカポカ叩く）これはお詫びをしなくては。さあ、中にどうぞ、ちよつとしたお礼をしましょう。ほら、なにもしない、なにもしないから。

赤頭巾ちゃん そういつてなにもしないやつはとんだヘタレだね。おじ様はヘタレなの？
豚所長 まさかまさか。私はヘタレではない、ただの紳士だよ。車もクラウンだし家にはサウナもある。さ、詳しい自己紹介は中でしょう。工員用のシャワーもあるし、おいしいお肉もあるよ。

赤頭巾ちゃん あたしがお肉につられるほどひもじく見える？

豚所長 誰にだって肉欲はあるものさ。

赤頭巾ちゃん 辞書ひいたことある？

豚所長 （豚のように鼻を鳴らし）ミートジョークミートジョーク。私の鉄板なんだ。それにね、うちの豚はうまいぞお。君が牛肉派でも鶏肉派でも、あつという間に骨の髄まで豚肉派になっちゃうこと間違いなしだ。え？ その自信はどこからくるか？ 教えてあげよう！

赤頭巾ちゃん 聞いてないけど教えて教えてー。

豚所長 答えはシンプル、命に敬意を払っているからさ。他所の工場では、豚のさばき損ねが山といる。食いものにならない臭い肉、ひび割れた豚骨。ああ！ なんと嘆かわしい話だ、思わず涙が出ちゃう。（涙声で）命をなんだと思ってるんだ！

赤頭巾ちゃん ハンカチハンカチ。

豚所長 しかし！ しかしだ、うちの工場にはそんな悲しい目をした豚は一頭もない！ つまりゼロ！ ここに来るまで色々あった。地元住人の反対運動、工員のストライキ、豚熱、エトセトラエトセトラ。その色々を乗り越え、うちの工場は精肉の頂に君臨しているのだ。まさにパーフェクトな工場だろう？ そんな工場がまずい豚肉をだすか？

味も素っ気も可能性もない豚骨を店に卸すか？ 否！ そんなわけがない！ 我々は豚の皮から目玉から、その骨の髄に至るまで、一切無駄にはしない。それが敬意というものだ、我々の血肉となる豚に対してのね。ご清聴ありがとうございます！

赤頭巾ちゃん おお。(拍手) つまりおじ様は、敬意を払えば豚はどこまでもおいしくなるって信仰してるのね？

豚所長 信仰という言葉にこめかみがちよっとヒクツとなるけど、その通り。これは人間関係でも一緒だ、敬意を払えば払うほど、人間だつてうまくなる。

赤頭巾ちゃん なにとは言わないけど？

豚所長 なにとは言わないけど。

赤頭巾ちゃんと豚所長、笑いあう。
その光景は非常に不快だ。

赤頭巾ちゃん じゃあおじ様。あたしはとつても汚くて醜くて鼻が曲がるほど臭いけど、敬意を持っておいしくしてくれる？

豚所長 もちろんもちろん！ 私の敬意があれば、ザリガニも住まないようなドブ水でも、上等のスコッチになるさ。

赤頭巾ちゃん わあ、まるでキリストね。

豚所長 彼ほどじゃない。でもまあ、彼の足元くらいにはいるかな？ (豚のように笑う)

男 (飛び出して) ま、待て！

豚所長 誰だ！ デイナーの邪魔をするのは！

男 そ、その手を離せ。

豚所長 別になにも掴んじやないが。

男 今にも掴もうとしてるじやないか。し、下心が爪の隙間から漏れているぞ。

豚所長 ん？ その声、覚えがあるぞ。

男 (声を変えて) 人違いです。

豚所長 まさか、貴様か裏切りのベジタリアン！

男 (声を戻して) いや、その。

豚所長 やれやれ、未練がましい男だ。クビになったのに、こうやって工場に参拝するとは。

男 そ、その子から、

豚所長 ああ！ 声が小さくて聞こえんなあ。

男 だから、その。

豚所長 いいか、私はとびつきり優しいからはつきり言つてやろう。お前の席はもうどこにもない、うちの工場のどこにもな。お前のような臆病者の水差し野郎は、私の工場の敷居をまたぐことも許さん。分かったか草食い野郎！ うん？ もう一回言つてやろうか？ その出来損ないの脳みそにも分かりやすいように。

男 (ほとんど泣きそう)

赤頭巾ちゃん フルボッコにされてるけど大丈夫？ タオル投げようか？

豚所長 もういい。さ、あんな甲斐性なしなんてほっといて、中で楽しくウノでもしよう。負けた人から一枚ずつ脱いでいく、ファクトリールールにのっとつて。

赤頭巾ちゃん うーん、迷っちゃう。

男 ぶ、豚。

豚所長 なんだあ？ ベジタリアンから鞍替えか？ お前は本当に節操が、

男 豚所長！

赤頭巾ちゃん あははははは！ ほんとに言った！ ほんとに言つちやつたよ！

豚所長 ……もう一度、言つてみる。

男 そうだ、お前は豚だ、しめた豚をよだれ垂らしながら貪り食う、共食いの豚野郎だ！
ななが敬意だ、お前が敬意を払つてるのは、はち切れんばかりの財布と、己の食欲だけじゃないか。顎で人をこき使い、自分の手を汚すことなく、ただうまいところだけ掻っ攫う。そんなお前が人生語るな豚野郎！ 豚肉と豚骨と、なによりお前のために泣いた人に謝罪しろ！

赤頭巾ちゃん ひゅー！ 格好良い、惚れちゃいそうだよ。

豚所長 その言葉(懐からあの日の豚骨を取り出す)こいつの前でも言えるか！

男 え？

豚所長 忘れたとは言わせんぞ、いや、お前が忘れたと言つてもこいつが忘れんだろう。思い出せんか、お前がしめそこねた豚の面を！ 私は忘れてはおらんぞ、だからこうして肌身離さず持つている。罪を手前勝手に忘れる不心得者の面に突きつけるためにな！

男 まさか。

豚所長 お前は人一倍、豚にボルトを打ち込むのが得意だったな。お前のボルト打ちはさながら母親の子守歌、だから私はお前に一目置いていたんだ。だが、あああの日だな、あ

の日全てが狂ったんだ。あの豚は、立派な豚だったなあ、うっすらと血の浮かんたピンク色の肌、ひび割れのひとつもない蹄、凜とした泣き声。私は、こいつはさぞうまい肉になるだろうと涎をふいたし、他の工員もなんとかおこぼれにあずかれないかと、

男 やめて下さい！

豚所長 なにをやめるんだね、ん？ あの豚の話か？ お前がしめそこねた、とびっきりうまそうで、うまくなりそこねたあの豚の話か？ どの話をやめて欲しいんだ、はっきり言ってくれんと分らんなあ。(不快に豚のように笑う)

男 ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……。

豚所長 逃避のための詫びの言葉でお前の罪が消えると思うか？ 消えやしないさ、世界中の洗剤を集めてもお前の臭いは消えやしない！ ベジタリアンが自分で食うわけでもない豚を殺したという罪は、六法全書が許しても豚が許さんだろう。(豚骨に) そうだよな？ うんうん、ほら、言ってるぞ。月のない夜には気を付けろとな。(不快に豚のように笑う)

男 ……。

豚所長 思えばあの時からか、お前がそんな顔つきになったのは。

男 え？

豚所長 まるで、くくつ、まるで、ひひつ。

赤頭巾ちゃん はつきり言っつてよお。

豚所長 ちよん切られた豚そっくりの顔だ。(豚のように大笑いする)

赤頭巾ちゃん わあお。

男 は？

豚所長 なんだ、あの時から一度も髭をそらなかったのか？ 不精なやつだ。見ればすぐ気づいたはずだぞ、ああ俺の顔はなんて豚そっくりなんだろう、とな！ (不快に豚のように笑う)

男 訂正して下さい。

豚所長 あ？

男 (豚所長の目を見すえ、よろよろと近づく) 訂正して下さい。

豚所長 な、なんだその目は。

男 (豚所長の目を見すえ、よろよろと近づく) 訂正して下さい！

豚所長 く、来るな！

男 (豚所長の目を見すえ、すがりつく) 訂正、訂正、訂正、訂正しろお!

豚所長 離せ、離せ!

男 (なおもすがりつき) 私は違う、私は違う! だから、訂正して下さい! 訂正を、訂正を!

豚所長 こ、このお!(豚骨でうちのめす)

男 (倒れるも、まだすがる) 訂正、訂正。

豚所長 ひ、ひっ、ひいいい!(男を必死にふりほどく) ど、どこへなりと失せろ! いや、私が失せてやるから、ついてくるなよ!(豚骨を男に投げつけ) こんじゃろめ!

男 (手を伸ばす) て、訂正。

豚所長 ひいいい!

豚所長、ほうほうの体で逃げ去る。

赤頭巾ちゃん、ケラケラと笑う。

赤頭巾ちゃん はは、最高。見た、おじさん? 豚所長のあの顔、永久保存版だよ。

男 (震える手で豚骨を手に取り) 違う、私は、こんなやつとは。

赤頭巾ちゃん 大丈夫? どっか打った?

男 (赤頭巾ちゃんにすがりつき) 言ってくれ!

赤頭巾ちゃん (動じずに) なんて?

男 豚じゃないって、きよ、去勢された豚じゃないって! 私は、私はちゃんと独立した意思ある人間だって! お願いだ、言ってくれ、君に言っただけで私には、

赤頭巾ちゃん 言われて満足できる?

男 え?

赤頭巾ちゃん 自分じゃなく、人に言われて満足? それで満足できる人って、ほんとにそうなの?

男 ……。

赤頭巾ちゃん (豚骨を取って) こうなっても、人の役には立てるよ。いいダシは出るし、ワンちゃんなんて大喜びで飛びつくだろうしね、あはは。

男 そんな、そんなのって。

赤頭巾ちゃん それでも、(豚骨を差し出す) いやなんだね?

男 え?

赤頭巾ちゃん 人の役に立てる、以外の自分になりたいんだよね？

男 ……。

赤頭巾ちゃん だったら、あたし達は両思いだ。

男 (差し出された豚骨を掴む)

赤頭巾ちゃん ふふ。それでいいんだよ、きっと、それでいいんだ。

白頭巾ちゃん、服がボロボロになって出てくる。

その衣服のほつれから、白頭巾ちゃんの白い肌が覗く。

男、思わずそれを見つめてしまう。

赤頭巾ちゃん ありや、なんでそんなエッチな格好になってるの？

白頭巾ちゃん その、どこかに隠れなきゃって思ってたなら、隠れたところに豚さんがいっ

ぱいいて、それで。

赤頭巾ちゃん ほー、それって豚の目にも魅力的にうつったことじゃないの？ モテモ

テじゃん、あはは。

白頭巾ちゃん 全然嬉しくないよ。

赤頭巾ちゃん さて、おじさん？

男 あ、え、なに？

赤頭巾ちゃん (白頭巾ちゃんを差し出し) いってみよう！

男・白頭巾ちゃん え？

男 いや、どういう。

赤頭巾ちゃん 白々しい、分かってるでしょ本当は。

白頭巾ちゃん お姉ちゃん。

赤頭巾ちゃん ねえ、あたし達の行く末が地獄だっていうのは分かるでしょ？

白頭巾ちゃん それは、その。

赤頭巾ちゃん そうじゃないって思いたいのは自由だけどさ、でも、そうなるって決まっ

ちゃってるから、今のうちに諦めたほうが楽だよ？ だって、あたし達はどこまでいった

って、食いものなんだから。あ、おじさんもね、あはは。

白頭巾ちゃん ……。

男 食いもの、私が、彼女達が、食いもの……。

赤頭巾ちゃん あたし達はさつきあんたの服をむしゃむしゃ食べた豚達と一緒に。なかに

は、人間様に食べられるなんて光栄な！ さあ、私をおいしくしておくれ！ なんて奇特で脳みそしびれた豚もいるかもしれないけど、大半の豚はきつと、自分は地獄に行くんだ、つて思ってるよ、きつと。ね、おじさん？ おじさんはずっと豚の傍にいたんだから分かるよね。

男 豚の、目が、ものを言うことがある、それは、そうだね。

赤頭巾ちゃん ほらね？ この工場の大ベテランのおじさんがこう言うんだから、間違いないよ。天国への切符はとっても高いんだ。庶民のあたし達や無一文の家畜には払えないほど、あはは。

男 豚も持つ、私と同じ目を。

白頭巾ちゃん そんな、そんなの。

赤頭巾ちゃん これからきつと、不潔なヒヒ爺やサディストのクソアマがあんたを買うだろうし、そんな地獄はいつまでも続く。あたし達の花びらが散るまで、何度も何度も、ひよっとしたら散っても。だからさ、最初くらいはいい思いしようよ。それくらい許されるつて。

白頭巾ちゃん ……。

赤頭巾ちゃん さ、おじさん。

男 なに、を？

赤頭巾ちゃん 情けは人の為ならず。

男 なが。

赤頭巾ちゃん おじさんのお情けで助かる花が、ここに一輪あるよ。

男 ……。

赤頭巾ちゃん 難しいことじゃないつて。

男 でも、その、やっぱりそういうものには、愛が、愛がないと。

赤頭巾ちゃん なりたいんでしょ、骨でも、肉でもない、誰かのためじゃない自分に。そう、愛なんて、影も香りも味もないものにじゃなく、影も香りも味もある、その豚骨に誓ったじゃない。

男 (豚骨を見て) こい、つに。

赤頭巾ちゃん 肉も骨も、ものを食わない、食いものは食わない、ただ食われるだけ。それがいやだったんでしょ？ だから、食いものから食いものにする側に。その点においてあたしとおじさんは繋がってるんだ。

男 いや、いや駄目だ、そんなことは許されない！ やっちゃいけない！ そんな権利誰

じゃあ、

白頭巾ちゃん あ、あなたが、好きです。

男 へ？

白頭巾ちゃん あ、あなたを、お慕いしています。

男 ……。

白頭巾ちゃん あ、あなたを、あなたを、あなたを愛しています。

男 ……。

白頭巾ちゃん こう言えば、あなたは、優しくしてくれますか？

赤頭巾ちゃん 優しくしてくれる？ 触れたら壊れてしまいそうなこの子に。

男、呼吸が荒くなり、白頭巾ちゃんに向かう自分の足を止めることが出来なくなる。
手から豚骨が零れ落ち、カランツと鳴る。

赤頭巾ちゃん さあ、はじめてに別れを告げて、おしまいとこんにはしよう。大丈夫、

おしまいはおしまいじゃない。ただもう二度と、はじめてが来ないだけだよ。

白頭巾ちゃん こわい、こわいよお。

赤頭巾ちゃん 目をつぶって。怖ければ、見たくないものなんて見なくていいんだよ。

白頭巾ちゃん、ギョツと目を閉じる。

白頭巾ちゃん (目を閉じて) あ、あなたの腕は、どうしてそんなに太いのですか？

男 君を抱きしめるためさ。

白頭巾ちゃん (目を閉じて) あなたの足は、どうしてそんなに太いのですか？

男 君の前で倒れないためさ。

白頭巾ちゃん (目を閉じて) あなたの耳は、どうしてそんなに大きいのですか？

男 君の声を聞き逃さないためさ。

白頭巾ちゃん (目を閉じて) あなたの目は、どうしてそんなに大きいのですか？

男 君のことをずっと見つめるためさ。

白頭巾ちゃん (目を開いて) あなたの口は、どうしてそんなに大きいのですか？

男 君を食べるためさ。

男、白頭巾ちゃんの頭巾にかぶりつき、引っぺがす。
白頭巾ちゃん、人形のように倒れ伏し、動かなくなる。

男 (口から頭巾をこぼし) あ、あ、ああ、ああああ！

赤頭巾ちゃん (白頭巾ちゃんの頭をなでて) お疲れ、って言っても聞こえないよね、ふふ。あたしき、あんたの星みたいキラキラ光る目が、ずっと羨ましかったんだ。目医者に行つて、あたしのと交換したいくらい、本気でそう思ってた。

男 まだだ、また私は、あんな目を、あんな目を生んでしまった……。

赤頭巾ちゃん でももういらぬや、そんな目。くすんで白く濁ったそんな目。うーん、あれだね。思ったよりこたえないや、そんな死んだ豚みたいな目で見つめられても。ねえ、やっぱりおじさんもこたえなかったんじゃないの？ あんな風に必死に誤魔化してたけど、あはは。

男 どうして、私は、こんな、ことを、年端もいかない、なにも知らない、少女を、己の獣欲に任せて。

赤頭巾ちゃん まだだよ、おじさん。

男 え？

赤頭巾ちゃん まだまだ、道半ばー。(白い頭巾を捨てる)

男 ひっ。

赤頭巾ちゃん (豚骨を捨てる) さっ。(二つを差し出す) 選んで。

男 へ？

赤頭巾ちゃん ふたつとも欲しい？ もう食いしん坊！ 駄目だよ、選んでいいのはひとつだけ。

男 な、なにを？

赤頭巾ちゃん 骨か、肉か、ふたつにひとつ。両方手に入るのなら、あたし達はこんなに苦しんでない。

男 (手が勝手に動く) あ、あ、あ。

赤頭巾ちゃん おじさんの体はもう決めたみたいだね。さて、おじさんの心は？

男 いやだ、いや、いや……。 (伸ばす手を止められない)

赤頭巾ちゃん なって、おじさん、なりたい自分に。そう願うのは子供だけの専売特許じゃないよ。

男 やめてくれ、私の手。やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ！ そっちにいったら、

そっちにいつてしまったら、もう引き返せないんだぞ、引き返せないんだぞ！

赤頭巾ちゃん むしろ、まだ引き返せると思ってたの？

男の手は、豚骨を掴む。

赤頭巾ちゃん とつくにおじさんも、引き返せないところにいるんだよ。

男、豚骨を高く掲げる。

男 (ひどく冷たい別人のような声で) 俺は過去を掴まない、ただ未来を掴む。

男の手、豚骨を放り捨て、白い頭巾を乱暴に掴み、鼻に押し付ける。

男 (声も出せずにうめく)

赤頭巾ちゃん さあ、食べて、目の前にある肉を！

男、白い頭巾をかいでしまう。

最初は抗いながら、しかし次第に、シンナー中毒者のように、深く深く激しく激しく吸い続ける。

一息ごとに、興奮したり、鎮静したり、性的な衝動が餅のように膨らんだり、全身が痺れあがるような快楽を感じたり、ズボンがグシャグシャになるくらい絶頂したりする。

この感覚は、頭巾の匂いが残っている限り、いつまでも続く。

男は白い頭巾を消費し続ける。

赤頭巾ちゃん、薄く笑いながら豚骨を拾う。

赤頭巾ちゃん あはは、がつついちゃって。そんなにおいしい？ そのお肉。こっちの骨

が寂しそうにしてるよお。(豚骨を手で遊ぶ) 可哀そうにねえ、選ばれなかったなん

て。ほらおじさん、優しい言葉のひとつくらいかけてやってよ、この残りものに。

男 (頭巾に夢中だ)

赤頭巾ちゃん はは、それどころじゃないか。ふふ、生きてるって感じがするでしょ、お

じさん。人を食いものになっている時が一番。ここまでしてあげたんだから、最後まで付き

合ってよね、あたしのために。

賑やかな声が聞こえる。

赤頭巾ちゃん ん？

老婆と黒頭巾、豚所長と警備員が詩を歌いながらやってくる。ちり取りを持った豚所長と、箒を持った警備員の首にはリードがつけられており、その先を黒頭巾が握っている。

老婆は豚骨をタクトのように振って、悦に浸っている。豚所長と警備員はやけくそに、ちり取りや箒を楽器に見立て歌う。

豚所長 この世の半分 豚ならば

警備員 残りの半分 なにかしら

老婆 もっと情熱的に！

豚所長 おしえてとうちゃん！ この肉に！

警備員 おしえてかあちゃん！ この骨に！

黒頭巾 いえいいえい！ いえいいえい！ いえいいえい！

老婆 もっとセンチメンタルにい

豚所長 しょせんこの世は 食い食われ

警備員 親子の情など 鼻紙よ

黒頭巾 どうせ食うなら 焼肉よ

三人 いただきます！

老婆 クライマアアアックスウウウウ！

豚所長 食う食う食う食う 腹いっぱい！

警備員 食う食う食う食う 夢いっぱい！

黒頭巾 そして最後は

老婆 お勘定うううう！

豚所長・警備員 ごっそうさん！

黒頭巾 デデドン！

老婆 はいっ！

どこからかの拍手。

いっしょ。

四人、そこら中に愛想をしたり、求められてもないのにサインをしたりする。

老婆 ありがとう、ありがとう、ああ二階席！ ありがとう。（見えない二階席に投げキスする）ああ三階席、ええええ！ 四階席までっ？

赤頭巾ちゃん なにしてんのさ。

老婆 あら、生意気なファン。舞台上がっちゃ駄目よ、お母さんはどこにいるの？

赤頭巾ちゃん お婆ちゃんはここにいるけどね。

老婆 って、なんだあんたかい。

黒頭巾 おら、お前らリハは終わりだ。仕事に戻れ。（リードをグンツと引っ張る）

豚所長・警備員 ぶひい！ ひどい扱い。（ブツブツ言いながら辺りを掃除する）

赤頭巾ちゃん いつバンドなんて組んだの？

老婆 知りたいかい？

赤頭巾ちゃん 全然。

老婆 じゃあ聞くな！

赤頭巾ちゃん そっちのお二人さんはなんでこんな茶番に付き合ってるんですかあ？

豚所長 やや、先程のお嬢さん！（掃除の手を止める）

黒頭巾 さぼんな。（リードを引く）

豚所長・警備員 ぶひっ！

豚所長 声に应えただけじゃない。

警備員 今の俺関係ないだろ！

黒頭巾 手え動かしながらやれ。

豚所長・警備員 とほほ。（掃除に戻る）

赤頭巾ちゃん 愉快的仲間達だね。

豚所長 どこが愉快だ、不愉快だよ！

老婆 うるさいねえ、豚の癖に。コンサートの前に喉潰したら承知しないよ。

警備員 誰が豚だ！ 豚が豚骨ラーメン作るなんて聞いたことないぞ！

黒頭巾 お前はなんの話をしてんだ？

赤頭巾ちゃん コンサート？ 初耳なだけど。

老婆 言っていないからね。招待券はなしだ、来たかったらチケット買いな。A席一万円、

オペラよりは安いだろ。

赤頭巾ちゃん 百万積まれても行かないね。

老婆 このドケチ！

赤頭巾ちゃん 無駄遣いしちゃ駄目って、お母さんにしつけられてるから。

老婆 親の顔も知らない癖に。

赤頭巾ちゃん 親も知らないことを知ってるよ。売れなくなったお花のいく先とか。

老婆 どこにいくんだい。

赤頭巾ちゃん それはあなたが一番よく知ってるでしょ？ 売れなくなったお花さん？

老婆 この、このっ、このっ！（豚骨をふり上げる）

赤頭巾ちゃん あ、叩いちやう？ お婆ちゃんの店で一番高い花を。（全然怖くなさそう

に）きゃーこわーい。

老婆 クソっ、ガキイ！（何故か警備員を豚骨で叩く）

警備員 ぎゃっ！

豚所長 ちよつとちよつと！

老婆 とられたもん取り返してなにが悪いんだい！

黒頭巾 婆ちゃん落ち着け。

豚所長 大丈夫か？

警備員 豚骨で殴られて死ぬのも、本望か。

豚所長 こんな軽症で死ぬか馬鹿。

赤頭巾ちゃん あらら、八つ当たりは可哀そうだよ。

老婆 ま、まあいい。こっちは気分がいいんだ、この程度の無礼は笑ってすますさ、はは

ははは！

警備員 思いつきキレてただろうが。

黒頭巾 （リードを引く構え）

豚所長・警備員 さ、掃除掃除。（掃除に戻る）

黒頭巾 あ、そうだ。お前、見なかったか？

赤頭巾ちゃん 豚なら奥にいるらしいよ。

黒頭巾 違う、あいつだ。

赤頭巾ちゃん 世の中には色んなあいつがいますからねえ。

黒頭巾 お前分かってんだろ。

赤頭巾ちゃん なにをお？

黒頭巾 この！（リードを引っ張る）

豚所長・警備員 八つ当たり反対！

老婆 お前よりも物分かりがよくて、お前くらい可愛い、あの子だよ。どこだい？

赤頭巾ちゃん (老婆たちが来たほうを指さす) あっち。

老婆たち (あっちを見る) どっち？

赤頭巾ちゃん 間違えた間違えた。(白頭巾を指す) そちらになります。

老婆たち (そちらを見る) そちら？

老婆 あ！ もうしょうがない子だね、こんな道端で寝ちやってまあ。ほら、起こしてやりな。

黒頭巾 へいへい。(リードを引っ張りながら行く)

豚所長・警備員 (逆らわずにむしろイキイキと) カワイ子ちゃんのいるところならどこへでも。

三人、仲良く白頭巾ちゃんを覗き込む。

黒頭巾 おい、起きろ。風邪ひくぞ。

豚所長 そうそう、この辺は狼が出るから大変なことになるよお。

警備員 にしても可愛い子だなあ、一緒に店を開きたい。

三人 んん？

老婆 その子に手え出したら承知しないからね。

黒頭巾 いや、婆ちゃん。

老婆 なんだい？

豚所長 いや、そのね。

警備員 この子にはなにかが足りない。

老婆 なにかってなんだい。

三人 分かったら言語化してるよ。(三人仲良く) ねー。

老婆 揃いも揃って役に立たない。(白頭巾ちゃんに歩み寄り、その手を引く) ほら、立てるかいかい？ ん？

三人 なにかが足りないだろ？

老婆 (手を乱暴に離し) どこだい。

赤頭巾ちゃん なにが？

四人 どこにやったんだ！

赤頭巾ちゃん 具体的に言って下さい。

老婆 (男に気付く) ん？ ああ発電所！ あんたもいたのかい。(しなをつくり) ねえ

旦那？ 知りませんか？ うちの大事なこの子の……、ああ！

三人 どうしたどうした？

老婆 こ、こいつが、この子、こいつ、こいつのお！(白頭巾ちゃんを蹴っ飛ばす)

赤頭巾ちゃん (目を覆う) きやつ、バイオレンス。(指の隙間からバッチリ見ている)

見てらんない。

警備員 おいてめえ。

豚所長 うちのもとに手え出しやがって。

豚所長・警備員 覚悟は出来てんだろうなあ？

黒頭巾 お前らはいっからうちのものになったんだ。

老婆 もういい。

三人 え？

老婆 覆水盆に返らずだ、もう、どうしようもない。こいつにはもう二束三文の値しかつ

かないよ。(忌々しく白頭巾ちゃんを蹴る)

赤頭巾ちゃん 花を値段でしか見ないなんて、駄目だよお。人生の後輩として忠告しとく

ね、あはは。

老婆 はあ、厄日だ。上げてから落とされたから、ダメージ二倍。

黒頭巾 まあ気を落とすな、うちで酒でも飲んで忘れよう。

老婆 あたしを慰められる立場かあんたは。(豚骨でポカんと叩く)

豚所長 あのお。

老婆 なんだい？

豚所長 この子はもう、いらないうってことですか？

老婆 なに聞いてたんだい。

豚所長 貰っちゃっていいですか？

三人 ん？

豚所長 この子。

黒頭巾 そういう趣味か？

豚所長 私は元々、生きた豚よりも死んだ豚の方が好きなもんですから、ぶひひ。

赤頭巾ちゃん ……。

老婆 ふふ、ふふ、ははは！ いいねえ、面白いねえ。ようがす、その枯れたお花、あなたにゼロ円で売りましたよ！

豚所長 買った！（ちり取りを警備員に押し付ける）

警備員 おい。

豚所長 （白頭巾ちゃんを抱きかかえ）うーん、いい香り。

警備員 ず、ズルいズルい！ ば、いえ、お婆さん。俺にも下さい。

老婆 なにを？

警備員 その豚骨を。

黒頭巾 どうして？

警備員 人も豚も中身が第一と知ってるもんで、その髓が欲しい。（可愛い声で）いいで

しよお？ ねえねえ？

老婆 気色悪いからやめな。ほらよ。（豚骨を無造作にほうる）

警備員 はっはっは！（豚骨を口で拾い、犬のようにくわえる）

老婆・黒頭巾・豚所長 （その姿を嘲笑う）

赤頭巾ちゃん 悪趣味ー。

黒頭巾 お前も混ざるか？

赤頭巾ちゃん 誰が。

老婆 仲間外れにするのは心が痛むねえ。

四人 （ニタニタと赤頭巾ちゃんを見る）

赤頭巾ちゃん 誰が仲間？ つまんない冗談だね。

老婆 怖いんだろう？ 可愛い可愛い赤頭巾ちゃん？

赤頭巾ちゃん なにが？

老婆 きちやうのが、さ。来るのが終わるか始まりか、そのどっちも怖くてしようがない

んでしよう？ 分かるよ分かる、よおく分かるよお。ねー？

三人 分かるー。（警備員はフゴフゴうめく）

四人 （ヒヒッと笑う）

赤頭巾ちゃん とつとと行けよ。

四人 どこへ？（警備員はフゴフゴうめく）

赤頭巾ちゃん どこへなりと！

老婆 具体的に言って頂戴なあ。

黒頭巾・豚所長・警備員 頂戴なあ。(警備員はフゴフゴうめく)

赤頭巾ちゃん (怒りで声が出ない)

黒頭巾 いじめるのはやめてやろう、可哀そうだから。(不快に笑う)

老婆 そうだねえ、あたしは優しいから。そんじや行くよお前ら！ 元気よく、朗らかに、我が物顔で！

黒頭巾・豚所長・警備員 おー！(警備員はフゴフゴうめく)

四人、不快に、不謹慎に歌う。

警備員はちり取りと箒を巧みに用いて盛り上げる。

豚所長 食うか！ 食うか！ 食われるか！

黒頭巾 病気のあの子のむこう脛！

老婆 白い肉下白い骨！

三人 一皮むけりや 人並よ！

豚所長 食うか！ 食うか！ 食われるか！

黒頭巾 帰らぬあの子の後ろ髪！

老婆 黒い襟元黒い髪！

三人 むいてもむいても 人並よ！

豚所長 人間どうせ いつか死ぬ！

黒頭巾 父ちゃん 母ちゃん 爺ちゃんも！

老婆 てめえの葬式 出られない！

豚所長 三途の川の渡し船！

黒頭巾 乗って良いのはひとりまで！

老婆 番が回ってくるまでに ここらでひとつ戯れに！

豚所長 歌おう！

黒頭巾 踊ろう！

三人 馬鹿騒ごう！

豚所長 歌おう！

黒頭巾 踊ろう！

老婆 あの世の果てに つくまでね

三人 みんなみんな 向かおうぜ！ あの世の果てまで一直線！(大笑い)

「みんなみんな、向かおうぜ」と歌いながら去っていく。
陽気に歌いながら去っていくその姿は、どこか寂しくもある。

赤頭巾ちゃんと、頭巾を吸うことをやめた男だけが残される。
赤頭巾ちゃんは涙を流し、血がにじむほど奥歯を噛みしめる。
その目の奥で、炎が燃えている。

男 にぎやかだったねえ、まるでお祭りみたいで、見てるこっちも嬉しくなっちゃおうよ
な、そんな、にぎやかさだったねえ。

赤頭巾ちゃん そうかな、おじさんとは気が合うと思ってただけだなあ。

男 お祭りか、いいなあ、もう随分行ってないなあ、きっと楽しいんだろうなあ、多分そ
こら中を豚が歩いてるんだろうなあ。

赤頭巾ちゃん おじさん。

男 なくなっちゃった。

赤頭巾ちゃん なにが？

男 なんだろう、なにかな、よく分からないけど、なくなったのは確かだ。

赤頭巾ちゃん 元からなかったんじゃない？

男 いや、生まれた時は確かにあった。きっと、つい最近まで。

赤頭巾ちゃん じゃあどつかで落としたんだよ。

男 そうかな。あ、あの時かもしれないね。

赤頭巾ちゃん いつ？

男 去勢された時。

赤頭巾ちゃん はは、それっていつさ。

男 君が言ったんじゃない。

赤頭巾ちゃん え？

男 私は去勢された豚だって。自分で奮い立つことも出来ず、唯々諾々と人の言うことに
従うことしか出来ない、豚だって。君が言ったんだよ？

赤頭巾ちゃん ……。

男 私は自分が食う豚を殺して飯を食います、これからはそうします。うん、言えるね、
これで君のお兄さんに馬鹿にされずにすむ。

赤頭巾ちゃん それじゃ共食いだよ。

男 しょうがないじゃない、だってお腹が減ってるんだから。

赤頭巾ちゃん なにが食べたい？

男 肉。

赤頭巾ちゃん 骨ならここにあるけど。

男 それはあとで歯をシーシーする時に貰うよ。

赤頭巾ちゃん 分かった。(豚骨をしまう)

男、赤頭巾ちゃんにユラユラと近づく。

赤頭巾ちゃん おじさん。

男 なに？

赤頭巾ちゃん あたし嘘ついちゃった。

男 なんて？

赤頭巾ちゃん おじさんは去勢なんかされてなかったんだ。ただちよつと、おじさんの中で寝ただけだったんだよ、きつと。

男 そうかな、そうかも。今は頭スッキリしてるしね。

赤頭巾ちゃん そう、起こしたのはきつとあたし。だからあたしには責任があるよね、寝た子を起こした責任が。

男 その責任感に乗らせて貰うよ、厚かましく。

赤頭巾ちゃん ええどうぞ。

男と赤頭巾ちゃん、正対する。

赤頭巾ちゃん おじさんは、どうしてそんなに腕が太いの？

男 君を逃がさないためさ。

赤頭巾ちゃん おじさんは、どうしてそんなに足が太いの？

男 君を追いかけるためさ。

赤頭巾ちゃん おじさんは、どうしてそんなに耳が大きいの？

男 君の泣き声を聞き逃さないためさ。

赤頭巾ちゃん おじさんは、どうしてそんなに目が大きいの？

男 君のすみずみをこの目に焼き付けるためさ。

赤頭巾ちゃん おじさんは、おじさんはどうして、そんなに口が大きいの？

男 お前を食べるためさ。

男、赤頭巾ちゃんの頭巾に齧り付き、引っぺがす。

赤頭巾ちゃん、ふらつきながらも自我を失わない。

男、赤い頭巾を一心不乱にかぎ続ける。

赤頭巾ちゃん どう、おじさん？ あたしの味は。ああ、そんな夢中になっちゃって、見てらんないよ、ほんと、あはは。やっど、やっどだよ、これであたしも、やっど変わる、やっど掴める、ずっと、ずっとずっと、欲しかったもの。(豚骨を取り出す)これは形見として、貰っていくよ？ いいよね、だっておじさんは、骨より肉を選んだんだもん。

男、赤い頭巾に吸い込まれそうなほど、匂いをかぎ続ける。

赤頭巾ちゃん、「赤頭巾」になる。

赤頭巾 (豚骨をマイクに見立て) お待たせしました！ 顔も知らぬ母の股から零れ落ち、いやいやながらこの世に生を受け、散々色々な方々から可愛がられ、もはや腐れ落ちるのを待つばかりのあたしが、不死鳥のようによみがえります！ どうですか皆さん、どうでしょう皆さん、どうなんだって聞いてんだよ！ はは、どんな気分？ 食いものにしてきたやつに、これから食いものにされるご気分は？ あたしには分かんないなあ、だってあたしは食いものにされてばかりだったから。でもこれからは違う、あたしは変わった生まれ変わった変わったんだ！ もうあの時のあたしじゃない、泣きながら冷たい水で体を洗ったあたしじゃないんだ！

赤頭巾、ケタケタと笑う。

赤頭巾 (工場に) あら、どうしたの？ そんなもの欲しそうな顔して。なに、あたしが欲しいの？ 残念お生憎様！ 誰がやるもんか、あんたみたいな歯磨きもろくに出来ない育ちの悪いデブにあたしはもつたない！ グラム百円の、安っぽい臭い臭い豚とせいぜいよろしくやりなよ。ねえ、あたしみたいな小娘に言いように言われてどんな気持ち？ 教えてよお、ケチケチせずにさあ。ほら、あんたはどう？ (誰かに豚骨を向けて) あんたは？ (別の誰かに豚骨を向けて) あんたは？ (また別の誰かに豚骨を向けて) あんたは？ (向けた相手は白頭巾ちゃんだ)

白頭巾ちゃん お姉ちゃん。

赤頭巾 え？（思わず豚骨を引っ込める）

白頭巾ちゃん、手に赤い花束を持って立っている。

白頭巾ちゃん おめでとう。

赤頭巾 あ、え、あ。

白頭巾ちゃん ついになりたいものになれたんだね。

赤頭巾 あんた、は。

影達 おめでとう御座います！

気付けば影達は赤頭巾を囲んでいる。

影達は手に手に豚骨を持っている。

影1 （豚骨をマイクに）今のお気持ちは？

赤頭巾 あ、ああ最高。

影2 （豚骨をマイクに）勝因はなんでしよう？

赤頭巾 いや、分かんないけど。

影3 （豚骨をマイクに）将来は一戸建てに住みたい？

赤頭巾 なにその質問。

影4 （豚骨をマイクに）このことを伝えたい人はいますか？

赤頭巾 それは。

影1 大好物は、

影2 嫌いな芸能人は、

影3 靴は何センチ、

影4 初恋の相手は、

影達 インタビューはこつちが先！（取っ組み合いの喧嘩を始める）

赤頭巾 （ひどく嬉しそうに）やめてー、あたしのために争わないでー。

白頭巾ちゃん お姉ちゃん。

赤頭巾 いや、悪いとは、うん、こゝ、

白頭巾ちゃん 別に怨んでないよ。

赤頭巾 え？

白頭巾ちゃん 嘘じゃない。地獄の前のかけ湯としては、あの出来事は悪くなかった。
赤頭巾 そ、そう、かな。

白頭巾ちゃん だからあたしは百パーセントの心で、この言葉を送るよ。おめでとう！
赤頭巾 あ、ありがとう！

影達 おめでどう、おめでどう、おめでどう御座います！

祝福、祝福、祝福の嵐。

影1 ああ赤頭巾！ 花の中の花！

影2 ああ赤頭巾！ 頂に立つ赤き女帝！

影3 ああ赤頭巾！ あなたはミュージズそのもの！

影4 ああ赤頭巾！ 太陽さえもあなたと比べられるのを恥じ、姿を隠すでしょう！

影達 ああ赤頭巾！ ああ赤頭巾！ 生まれてきてくれてありがとう！ 私達の前に立つ
てくれてありがとう！ ああ赤頭巾！ ああ赤頭巾！

赤頭巾 ああ、もっと、もっともっと頂戴！ もっとあたしを、愛して！

赤頭巾はまさしく幸福の絶頂にある。

白頭巾ちゃん、そんな赤頭巾に赤い花束を差し出す。

赤頭巾 あら、綺麗な花。あたしに負けなくらい綺麗な赤い花。

赤頭巾、それを受取ろうと、

白頭巾ちゃん ところで。

赤頭巾 なに？

白頭巾ちゃん お姉ちゃんはなにになりたかったの？

祝福は止み、幸福はプレゼントの包装紙のように破られ、その中にあるグロテスクな
怨嗟があらわになる。

影達 (豚骨を掲げ) 骨、骨、豚の骨。

赤頭巾 え？

影達 (互いを指し) 肉、肉、豚の肉。

白頭巾ちゃん 大人やズルいやつに骨までしゃぶられ、地獄を見て、それでも堪えて、それでも歪んで、どれが自分の真ん中かも忘れちゃって、最後には自分が齧られた穴を埋めるために大切なものを食いものにして、それに喜びを感じるようになった。目を落とせば、お姉ちゃんの足元には赤い花びらが一面に。そこはまるで血の河のよう。

影達 血が、血が、血が流れ、ここはいつしか、花畑。

赤頭巾 (靴が血だまりを踏むのを感じて) あ、あ、あ。

白頭巾ちゃん あんなに好きだったのに、あんなにいい匂いだったのに、投げ捨ててしまった、赤い花。ねえ、それでも掴みたかったものはなんだったの？ そもそもお姉ちゃんはなんだったの？

影達 (赤頭巾に豚骨を突きつけ) なに？

赤頭巾 あたしは。

影1・3 赤頭巾。

影2・4 少女よ。

赤頭巾 違う。

影2・4 赤頭巾。

影1・3 少女よ。

赤頭巾 違う！

影達 少女よ！

赤頭巾 違う！ あたしはもう！

白頭巾ちゃん ほら見て、お姉ちゃん！ 星の数ほどの私達の姉妹が白く濁った目でこつちを見ているよ！

赤頭巾 ひっ！

影達 少女よ、私の愛した少女達よ！

白頭巾ちゃん 思い出してお姉ちゃん、自分が生まれた日のことを、祝福されることなく生まれた自分自身のことを。なにか大切なものを落つことしちやっただあの時の自分のこと。

赤頭巾 いやだよ、せつかくあたしは、やっど。

白頭巾ちゃん・影達 だからなにを掴んだの？

赤頭巾 あたしは！ あたしは、あたしは、あたしは、……なにを、掴んだの？

白頭巾ちゃん 絞られ絞られ菜種よりも絞られ続け、搾りかすになった私達になにが残っ

てるの？

赤頭巾 あ、あ、あ、あ、あああ！

白頭巾ちゃん お姉ちゃん。

白頭巾ちゃん、赤頭巾に赤い花束を差し出す。

影達 ああ、これが私達の求めた。

影達、それを取ろうと手を伸ばす。

赤頭巾、それにすがるように奪い取る。

赤頭巾 (それを高く掲げる) これが！ これがあたしの掴んだ！

白頭巾ちゃん 結局、自分しか掴めなかったね。

赤頭巾、手の花束を取り落とす。

白頭巾ちゃん お姉ちゃん、いこう。それでさ、楽になっちゃおうよ。難しいこととか悲しいこととか苦しいこととか、もうそんなの全部考えずにすむように、ね？ もう悔しさに震えながら天井のシミを数えなくてもいいんだよ。それに、この道を教えてくれたのはお姉ちゃんじゃない。

赤頭巾 (懐から豚骨を取り出す) これは、これは、あたしの、最後の思い出。

白頭巾ちゃん、それをひったくる。

赤頭巾 あ！

白頭巾ちゃん ずるいよお姉ちゃん、自分だけ思い出で暖まろうなんて。(豚骨をゲートの向こうに放り込む)

赤頭巾 (空しく手を伸ばし) あ、あ、あ。

白頭巾ちゃん さ、いこう？ また代わりはきつと見つかるよ、うんきつと。

白頭巾ちゃん、赤頭巾に手を差し伸べる。

赤頭巾、白頭巾ちゃんの手をとる。

白頭巾ちゃん 怖くないよ、お姉ちゃん。痛みは一瞬、安らぎは永遠。もう地獄からはさ
ようなら。いくところは決して天国じゃないだろうけど、地獄よりはマシだよ。

影1 どこへいくのですか？

白頭巾ちゃん ありのままの自分でいられるところ。

影2 どこへいくのですか？

白頭巾ちゃん なにも落とさずにすむところ。

影3 どこへいくのですか？

白頭巾ちゃん 誰にも食いものにされないところ。

影4 どこへいくのですか？

白頭巾ちゃん 誰も食いものにせずにすむところ。

影達 そんなところ本当にあるのですか？

白頭巾ちゃん ついてきたらいかがですか？

影達 それでは本当に？

白頭巾ちゃん どうでしょう。

影達 私達はただ、行かざるから抜け出したいだけ。

白頭巾ちゃん どうされますか？

影達 お供します、一縷の望みをかけて。

白頭巾ちゃん、赤頭巾の手を引き工場に向かう。
影達は詩を呟きながらついていく。

影1 肉が落ち

影2 骨が折れ

影3 目から光が

影4 消え失せて

影1 喉はかれるし

影2 腹は減る

影達 それでも歩みを止められず

影3 齧られ

影4 舐られ

影達 なにもない

影1 なにもものにもならず

影2 なにもものにもなれず

影3 ただ時が過ぎ

影4 ただ泣いて

影1 ただのひとも残らない

影達 誰も答えちゃくれないが それでも問いたい この問いを

私はいつたい なんだった

「」まで。

影達は、豚骨をその手から取り落とすが、それに気づかず白頭巾ちゃんに続く。
赤頭巾はすっかり「赤頭巾ちゃん」に戻っている。
工場は一同を飲み込む。

去った後の沈黙。

男 (頭巾から顔をあげて) ああ、ああ、ああ、ああ、ああ？

男はキョロキョロと辺りをうかがい、赤頭巾ちゃんの影を探す。

男 どこいつちやっただら。おかわりが欲しいのに、まだお腹が減ってるのに。

男、落ちた花束を見つけ、その匂いを嗅ぐ。

男 ああ、なんていい香りなんだ。なんて、いい香り。

男、花束の匂いを堪能する。

そして、男は花束に嘔り付く。

男 なんて、甘いんだ。なんて、瑞々しいんだ。なんて、苦いんだ。なんて、なんて、なんで、なんで？ 違う、これは私のものじゃ、私じゃない。

男はどこか酔いが冷めたようにヨロヨロと立ち上がり、花束を抱えたまま、影達の落

とした豚骨を拾い始める。

男 (豚骨を嗅ぎ) 違う。(捨てて別の豚骨を嗅ぎ) これも違う。(捨てて別の豚骨を嗅ぎ) これじゃない。(捨てて別の豚骨を嗅ぐ) これでもない。(捨てて拾おうとするも、もう豚骨はない) どこだ、私は、私はどこへ行ってしまったんだ？

男、工場のゲートを開けようとするも、開かない。固く閉じられている。

男 すいませーん、すいませーん、そっちに私がいませんか？ プライドが高い癖に小心で、助平なのに潔癖で、モラルにがんじがらめな私です。人を食いものになんてしない、なんて言いつつも、その実お腹ペコペコの卑しい私です。そんな私を知りませんか？ ここにはいないみたいなんです、だったらそっちにいるとしか私には思えないんです。どうですか？ そっちに私はいませんか？

「少女」がトコトコと歩いてくる。

少女 どこいっちゃったんだろ？

男 (少女をジッと見る)

少女 あ！(男に走り寄る)

男 (ビクツと後ずさる)

少女 それあたし。見つけてくれたの？

男 (なにも言えず、ただ頷く)

少女 ありがとね、おじさん！(男から花束を受け取る) それじゃこれをお礼に。(男に

豚骨を押し付ける)

男 あ、いや、その。

少女 遠慮しないで！ ギブアンドテイクだよ、えへへ。

「少女」、蝶のように男から離れ、花束の匂いを嗅ぐ。

少女 いい匂い。誰にもあげない！

「少女」、コケティッシュにあっかんべーをし、無邪気に笑いながら、花束を抱きか

かえ走り去る。

男、少女の背中をぼうつと見送った後、受け取った豚骨をジッと見る。
男、その豚骨にあるあの日の傷を見つける。

男 ああ、そうか、そうだったのか、私は、取り返しのつかないことをしてしまったんだね。そしてまた、してしまったんだね。そうか、取り返しがつかないんだな、どうやったって、きつと時間を巻き戻しても、同じようなことをしてしまいそうな気がするよ。そう、そんな気がする。だから、君は私の前に立っているんだね。

気付けば工場のゲートが開いている。

男、ゲートの方を振り返る。

男 立ってたんだね、肉が削げ落ち、骨すらも残っていないその身で、ずっと立っていたんだね。行くよ、そっちに。君は来て欲しくも無いだろうけど、それでも私はそっちに行かざるをえないんだ。行きたいところに行きたいけれど、行くべき場所へ行かなくちゃいけないけれど、行かざるをえないんだ。そうだろう？ 私よ、私の血よ肉よ。私はまさにそれ以外にならなくちゃいけないんだ。

男、工場へのゲートの中へ入る。

「少女」、花束を抱えながらまたトコトコとやってくる。

男と「少女」、目が合う。

「少女」と男、ニッコリと微笑みあう。

工場のゲートが閉まり、男は消える。

「少女」、こちらを振り返り、媚びるわけでもなく、ニッコリと微笑み、可憐にお辞儀をする。

暗闇がすぐそこまで来ている。

それでも「少女」は、ニッコリと笑っている。

幕。